
ある二人のある一夜

柊葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある二人のある一夜

【Nコード】

N0945E

【作者名】

柊葉一

【あらすじ】

二人の関係についてはあえて言及なし。人肌の温度を感じたい時に、有無を言わずに受け入れてくれる、その優しさはどこからくるものか。

莉月は真夜中の部屋で、携帯のディスプレイを見つめていた。先ほど届いたメールには『起きてる？』と一言だけ書かれていた。莉月はいつも通りに返事を書く。当たり前だが、起きているから返事が打てるのだ。それを送信して立ち上がり、部屋の鏡で身だしなみをチェックする。寝癖はほとんどついていなかった。化粧水をもう一度付けておこうか……。

頬に触れながら、莉月は鏡の横にあるパイプラックから化粧水を取った。それをたつぷりと顔に沁み込ませてから、ついでにハンドクリームを手に馴染ませる。ちょうどその時、自分を叩き起こしたのと同じ着信音が鳴り、莉月はその音に振り返る。着信音が鳴り終わるまではそのまま手を撫で、それからゆっくりと手に取り、受信ボックスを開ける。莉月は思わず微笑んだ。やっぱり、来るんだ。

了解の意を返信してから、莉月はもう一度鏡に向き直った後、キッチンで薬缶を火にかけた。おそらく外が寒いだろうことを予想してのことだ。部屋のヒーターを付けようかとも思ったが、今から来るその人は冬でも暑がりだったりするので、温かい飲み物で十分だろうと判断してホットココアを作ることにした。それにどうせすぐに暑くなるのだから。

そのままお湯が沸くのを待っていると、自転車のキィキィという音がアパートに近づいてきた。そして駐車場になっている部屋の真下でその音は止まる。階段を上がる足音が、次第に部屋に近づいてくるのが分かる。お湯が、もうすぐ沸騰しそうだった。

チャイムが鳴ると、莉月はゆっくりと玄関へ行き、非常に緩慢な動作で、ドアチェーンと鍵を外し、ドアを開けた。10センチほど空いた隙間から相手の顔を見上げる。

「……こんばんわ。」

軽く微笑みながら、莉月は声を発した。相手がドアを引いて、返事もせずに入ってくる。相手の脇から手を伸ばして、莉月は再びドアの鍵をかけた。

その男は何も言わずに、莉月の腰へ手を回し、莉月を抱き寄せた。久しぶりの抱擁を味わうように、莉月も相手の背中に手を添える。

「……寒かった。」

ようやく発した男の言葉に、莉月は呆れたように笑う。

「マフラーは？」

「着けるの忘れた。」

「それじゃ、自業自得ですよ。」

「あー…、あつたけえ……」

そう言つて男は莉月の首筋に顔を埋めた。くすぐつたくて、莉月は相手に顔を上げるように促す。触れた頬が、ひんやりと冷たかった。二人の間に割つて入るように、薬缶がしゅんしゅんと鳴る。

「あ、沸いた」

それを合図に、ようやく男は莉月から離れて靴を脱ぐ。火を止めに、莉月はコンロへ駆け寄った。

「食器棚から、カップ取ってもらえます？二つ……」振り向きながら言う。しかし、相手は真後ろに立つて、彼女の視界をふさいでいた。

振り向き仰いだ相手の顔を、莉月は訝しげに覗きこむ。

「どうしたんですか？」逆光で相手の顔がよく見えない。

男は何も言わず、そうしてまた莉月を抱き竦めた。冷たい頬がこめかみに当たる。

「えええ……？」多少困惑しながらも、結局莉月は相手の背中に手を回した。そして2、3度男の背中をポンポンとあやすように叩いてやる。

「先輩、飲んできたの？」

思いついたように、莉月は彼の行動パターンを読んだ。そういえば今までも、飲みの帰りに寄って行くことが多かった気がする。

「ねえ……」男がようやく声を発する。

「はい？」

「早く、布団行こ。」

耳元で囁かれた言葉は、一瞬、莉月の拳動を奪った。彼の腕に力が込められる。

「はあ……」と莉月はため息をつく、彼の首筋に軽くキスをした。キスに促され、男は姿勢を正すようにして顔を上げた。眼鏡の奥の瞳がまっすぐに莉月を捕えて、見下ろしていた。

そっと、冷たい手が莉月の頬に触れ、顎まで撫で降りる。彼の顔が近付いてきて、莉月はゆっくりを目をつむる。久し振りのキスだ。最初は触れるか触れないかの、お互いを試しているようなキス。そうして互いを確かめあってから、じゃれ合うように、舐め合うように、噛み付くように、口づけは激しさを増した。

「……久し振り」

キスの合間に莉月は呟いた。

「どれくらい？」莉月の頬に口づけながら、男が言う。

「うんと……、2、週間ぶりくらいかな………ちよっと、先輩」

相手の腕を掴む。服の下に手を滑り込ませるのが、この男は上手い。

「何？」不満げな声。

「ここじゃだ」

まっすぐに相手の顔を見上げる。キッチンに押しつけられた背中が痛かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0945e/>

ある二人のある一夜

2011年1月18日04時32分発行